

行動を実験的に調べた。

テレピン油注入後5日目のラットに<sup>131</sup>I-人血清アルブミンを静注し、静注後6日目までの abscess および臓器中の取込率を求めた。また上記ラットに in vitro で標識した<sup>51</sup>Cr-ラット赤血球を静注し、1, 24, 48時間後に abscess および臓器中の取込率を求めた。1g 当たりの取込率を、ラットの体重差を無くするため、体重 100g 当たりに基づいた %/g で表した。

<sup>51</sup>Cr-ラット赤血球の取込率は、48時間後で 0.06%/g と、abscess 中の血液量はきわめて少量であった。

<sup>131</sup>I-人血清アルブミンの取込率は、1, 3, 24時間後におおの 1.23, 1.84, 0.83%/g となり血液中アルブミンの abscess への浸出は非常に多かったが、浸出したアルブミンは比較的短時間に abscess から消失した。

<sup>131</sup>I-人血清アルブミンを指標とした血管からの組織への浸出率を計算したところ、1時間後の abscess は 50.25 と筋肉、肝臓、腎臓のおおの 3.71, 3.22, 5.43 より極端に大きかった。

### 33. Early Ga-67 Scan (5時間像) の検討 第3報

東 光太郎 小林 真 浜田 重雄  
西木 雅裕 山本 達 (金医大・放)

われわれは、Ga-67 を静注して5時間後 (early scan) と48時間後 (delayed scan) の image を比較し Ga-67 の体内分布を調べその臨床的意義について検討している。今回は、RI 異常集積を認めない70例を対象として視覚的に各臓器の描出率を調べ、さらに、そのうちの30例を対象として各臓器のカウントを測定した。各臓器における放射能濃度の指標として、各臓器と大腿部軟部組織のカウント比を算出した。また、各臓器における放射能濃度の経時的变化の指標として、各臓器における early および delayed scan のカウント比を算出した。

その結果、各臓器の Ga-67 の集積は、Ga 静注後の時間によってパターンが異なることがわかった。また症例によって各臓器と大腿部軟部組織のカウント比に大きいバラツキが見られ、Ga-67 の体内分布の複雑性を知ることができた。今後は、Ga-67 の異常集積の症例についても同様の検討をしていきたい。

### 34. 骨シンチグラフィによる胃癌骨転移の臨床的検討 (第3報)——椎体への転移部位について——

瀬戸 幹人 利波 紀久 小泉 潔  
分校 久志 油野 民雄 久田 欣一  
(金大・核)  
須井 修 (徳大・放)

われわれは、骨シンチグラフィによる胃癌骨転移の臨床的特徴についてすでに報告してきたが、今回さらに症例数を重ね前回とほぼ同様の結果を得た。

また胃癌の骨転移経路について従来述べられてきた門脈型のみならず、脊椎静脈相の関与する非門脈経路の存在を想像してきたが、これに関連して椎体への転移部位について検討を加えた。

すなわち、いわゆる diffuse bone metastases を除く骨転移例16例中13例に椎体への転移を認めたが、1椎体当たりの平均転移例数を求めると頸椎で  $4.00 \pm 1.41$  例、胸椎で  $4.25 \pm 1.14$  例、腰椎で  $4.80 \pm 1.30$  例、仙骨で3.00例で腰椎へ近づくにつれて増加する傾向が見られたが有意差は認めなかった。

食道静脈→半奇静脈・高静脈→肋間静脈→脊椎静脈叢と想像する経路では胸椎への転移が多いかと想像していたが、腰椎への転移が最も多かった。しかし、脊椎静脈内での流動性のため全椎体に比較的均等な転移例数の分布を示したものと考えた。

### 35. 骨シンチグラフィによる骨転移の検討 (前立腺癌症例を中心に)

吉田 宏 松尾 定雄 矢橋 俊丈  
岩田富貴子 金森 勇雄 中野 哲  
(大垣市民病院・放)  
佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

骨シンチグラフィ (以下、骨シンチ) が、悪性腫瘍の骨転移の検索に広く応用されていることは周知のごとくである。

今回、われわれは、悪性腫瘍の中でも最も骨転移を起しやすい疾患のひとつである前立腺癌について骨シンチを中心とした骨転移の検索を行い、若干の知見を得たので報告した。対象は、病理組織学的に前立腺癌と確診されたもののうち骨シンチが施行された55例である。年齢は50~92歳、平均71.9歳である。